ネパール訪問記：　2022 年 6 月 1 日出発　6 月 24 日帰国

長谷川隆　hasegawa1087suntala@outlook.jp

・ネパール訪問歴：7 回。学生時代ランタントレッキング 22 日間（ランシサカルカ、ゴサインクンド）。
・ネパールでの青年海外協力隊経験（昭和 56 年 2 次隊）　：40 年前に果樹栽培指導 2 年。コシ県ボジプール。
・旅の目的：ランタントレッキング（10 月のアンナプルナトレッキングの準備）、日本語学校訪問、技能実習生で来日予定者との面談、シタール奏者ススマさんの SEWA 教育支援、音楽交流

ランタン村を 43 年ぶりに再訪

航空便：Ethihad 航空（UAE 便）：往復 13.8 万円。直行便のネパール航空では 20 万円弱で高額。
　　アラブ首長国連邦経由。行きは 28 時間（アブダビ空港で 8 時間トランジット）

＊コロナ規制の影響：
・出国前にコロナワクチン 2 回以上の英文接種証明必要であった。八王子保健所で取得。
・コロナの影響で成田空港は閑散。店は 6 割閉まっている。
・日本の規制が強く（外国出国前の PCR 検査で陰性の証明が必要、帰国便は飛行機に 120 人ほどまでの搭乗規制）帰国便は往路の 2 倍高い。このような規制をいまだにしているのは日本位で欧米にはないもの。
　コロナ前にネパール往復 7−8 万円であった航空券が 14 万から 20 万円と高くなっている。それで日本人の海外旅行が増えなく、外国からも来てもらえない。帰国便では UAE からの搭乗者は日本人の駐在員の家族らしき人が目立ったくらいで、全体に少なく 3 割程度しか席が埋まっていなかった。多くの人が 3 席を使って寝ていた。

＊UAE アブダビ空港にて：
アブダビ空港でトランジットに降りると、コーランの放送が高らかに響き渡っていた。イスラムの世界だ。
空港ホテルの前で、ネパール警察から 3 年間の予定で派遣された人に会い、少し話した。気軽に話せるところがネパール人のよさだ。空港の清掃係もネパール人だった。アラブ諸国に大勢出稼ぎに来ているようだ。
アブダビからネパール行きはアラブ就労者便という感じで、乗客は全てネパール人かと思われるほどだった。
この便はサウジアラビア航空で、ネパール人には食事も飲み物も出されなかった。出稼ぎ帰省便扱いか。
静岡で自動車整備を学び勤務するネパール人に声をかけられた。八王子の日本語学校で学んだそうだ。
数年ぶりの休暇でネパールに帰国とのこと。日本で車を買うそうだ。Line の連絡先交換もする。

＊UAE や外国で働くネパール人：

カトマンズで Akshara 日本語学校に行く前に朝食を取りに店に入ると、UAE で保安 Security の仕事で何年か勤務の人と話ができた。バイクで私を連れて行ってくれる法律家のスダルシャンさんも気楽に知らない人に話しかける。おーい弟よ、と。ネパール人も単純労働だけではない仕事をしている。1 か月ほどの休暇の帰国のようだ。朝からビール大瓶を開けていたが。

ネパールは、GDP に占める外国に働きに行ってる人からの送金の割合が 3 割くらいもある。国内産業が乏しく、外国での出稼ぎが大きな収入源になっている。これは南アジアでもネパールが顕著だ。山国という理由だけか。10 年ほど前にマオイストがネパール中の地方で問題を起し、それで急激にアラブへの出稼ぎが増えたとも聞く。最近はだいぶ減ったようだが外国からの送金額は減っていない。

＊アラブ首長国連邦（UAE）での砂漠の植林事業の思い出：(詳細は最後に記す)

ネパール協力隊、オーストラリアでのワーキングホリデイの後、UAE のルブアルハリ砂漠で植林プロジェクトに参加した。300ha の砂漠地の植林事業をパキスタン人労働者 20 人と行なった思い出の場所だ。

＊ネパールでのコロナ対策：

1 年半コロナでロックダウン（学校の何割か閉鎖）を厳しくしていたそうだが、今はマスクする人は１％位しかいなく、人々はほとんど気にしなくなっている。スダルシャンさんはこれはよくないと言っていたが。ワクチン接種は主に中国製で欧米製もあったようだ。何日も歩いてゆく村の人にはワクチンは届かないのでは、と思われた。

＊ネパールの微々たる社会保障制度：

国家予算に占める社会保障費用は 3%位だけ。しかし国として財政的には健全。日本のように増え続ける社会保障費に悩まされる状況ではないが、外貨を獲得できるような輸出産業が育っていない問題がある。
健康保険はほぼなし（家族の大病で土地や家を売って治療費を工面したという話がよくあるとか)。
ましてや高額療養費などなし。失業保険なし。

年金は公務員以外はなし（月に 4000 円ほどだけあるらしいが、お茶代にしかならないという)。
なお公務員は 30 年間までの勤務で定年となるそうだ。ネパール警察で No2 に上り詰め、ニューヨークで国連職員アジア代表でもあったプスカール君も 53 歳で定年となった。年金は月に 6 万円ほどだろうと、弟でタバコ会社スーリヤネパールのマネージャーのウッタム君が話してくれた。兄のプスカール君は私がボジプールにいた時のホームステイ先の長男で、優秀な生徒が集まるブダニールカンタの Boarding School（寄宿学校）で小中学校から親元を離れて学んでいた。

年金も健康保険も失業保険も、日本でも江戸時代にはなかっただろうと思う。ネパールは今も子供や孫に老後は頼って生きていくしかないだろう。もっともネパール人の当たり前の考えとして、親の面倒は見るもの、家族は助け合って生きていくもの、という意識がとてもしっかりある。

ある村で、カトマンズで手術をしないと治らない、至急ヘリで輸送しないといけない患者がいたが、80 万円ほどする、それで村中で話し合ったが、そんな金は集められない、と、村中で病人が平穏にあの世に行けるように祈った、という話を聞いた。

＊ネパールの最近の状況：

＊史上初のトンネルが道路にできる予定。また初の鉄道が走ったニュース。やっとそういう段階かと驚く。カトマンズ盆地の渋滞解決に、高速道路、地下鉄が必要と思うが、とてもその段階ではないらしい。

＊週休 2 日制導入は公務員だけに。(1 か月間民間にも導入したが、反発強く却下)。10 時から仕事をする人が、朝の 6、7 時から 9 時過ぎまで数時間、他の仕事をしたり、学校で勉強したりする。

多くの日本語学校は早朝 7 時から 9 時までのクラスが多く、10 時から働けるようになっている。学校、大学も早朝クラスがあるようだ。

フレックスタイムの導入はない。まだ皆、9 時や 10 時の同じ時間に出勤しているようで、それでなおさら通勤ラッシュで道路が激しく渋滞している模様。

＊土地高騰：カトマンズ盆地全体に土地高騰。土地は 4－5 年で 2 倍に。最近はカトマンズよりも地方都市で値上がりが顕著とも聞く。その分、山の斜面の村々は過疎化が激しく進み、また農地が耕作放棄されているとも聞く。私がいたボジプール郡にはバザールには道路も電気も通じ華やかになっても、そこから 1 時間も歩いたところには車も入れず家も空き家が増え、畑も耕されない、と聞いた。

キルティプールで共稼ぎの夫婦が、土地 50 坪ほど 1500 万円（庭なし。親の土地)、家 1500 万円（4 階建て。共稼ぎで購入）を購入していた。木材高騰で、床や壁に木材が使えないと嘆いていた。建築に 1 年もかかるそうだ。奥さんが銀行で働いていて稼ぎが結構いいから買えるのかな、と。地方から出てきて、月収 2－3 万円の労働者には、家を建てることは夢以外の何ものでもないのか。

＊銀行金利 9％位で、9 年で預金は 2 倍になるとか。ローン金利は 10 数%とか。このため不動産業が栄え、銀行行の収入はよく、銀行への就職希望者は多いらしい。

＊ネパールから日本など外国に留学・就労に行く若者は 100 万円以上の借金をしていくことが普通のようだ。それで日本で週 28 時間のアルバイト（月に 10 万円ほど）で、授業料を払い、生活し、かつ借金を返していくのは考えられない苦行ではないかと思う。それでも仕事のないネパールを離れて外国に職を求めてまさに人生を賭けた挑戦をするのだと思う。先に日本等に行った先輩などを頼りに。

＊ガソリン高騰：1 リッターが 1 年で 108 ルピーから 198 ルピー（約 210 円）→178 ルピー（(約 185 円:日本より高い)。タクシーで 30 分ほど走って、1000 円ほどだったが、このガソリン代で儲けはすごく少ないだろうと思う。タクシー運転手は毎月 2－3 日の休みで、毎日朝 6 時くらいから夜 10 時まで働くという。たしか 4－50 万円の中古車を買い、ローンで返しながら、家族 4 人（教育費は毎月 1 万円ほど？）を養わねばならない。

＊ビールが日本より高い。大瓶 400 円。トレッキングで高地では大瓶 1000 円近く。ワインも日本よりずっと高い。一方、現地ローカルのお酒、ロキシ、チャンは安価だが、正規のレストランでは販売できないらしい。闇で販売、のような形になっているようだ。ローカル酒は自宅で作るので税金が取れないせいなのか？

40 年前のカトマンズの水田と清流。今は家々が立ち並ぶ。川はよみがえるのか。

・タクシー運転手の生活について聞いた話：

トレッキングからジープで帰り、そこからタクシーで荷物の引っ越しに 1 時間ほど走ってもらって 1,000 円強だった。日本なら 4,000 円以上は掛かるところ日本よりガソリン代が高いのに。彼の話では、毎日休むことなく朝 6 時から夜 10 時まで働いている、10 月のダサインの 10 日間の祭に数日だけ田舎に帰る、三年生の子供の教育費に毎月 8,000 円くらいかかる、中学生になれば 15,000 円はかかる、3 年前に古い車を 30 万円位で買いローン返済も大変、とのこと。なかなか苦労の生活だ。

＊毎日あちこち私をバイクで連れて行ってくれた法律家のスダルシャンさん：

彼は 5 年ほど前に、八王子でストリートチュルドレンの学校運営についての講演をしてくれた。3 年前にネパールに私がネパールに来たときは、親がいない等で貧しい子供を引き取っている学校を運営すると言っていて案内してくれたが、コロナで生徒はみんな授業料を払えなくなり学校は閉じざるを得なかったと残念そうだった。今は西ネパールの学校を支援するそうで、時々飛行機で行っているようだ。また日本とネパールの交流センターを設立したいと言っていた。何度も日本に来ている。

カトマンズの中心地に古い自宅があり、夕食に呼んでくれた。他にも新しい大きな家を持っていて、人に貸してあるそうだ。家は相当値上がりしているそう。奥様は銀行のマネージャーでやり手そうな聡明な方。車で地方出張もする。とても感じのいい方で、私とネパールのいろいろなことについて話ができた。二人のなれそめも聞け、もともと近所同士だったそうだ。旦那は弁護士というが、仕事があまりないのか、カトマンズで毎日のように私をバイクであちこち連れて行ってくれた。

84 才の母親も、15 の娘さんも会って話してくれた。お婆さんは品のいい方でした。母親が腸の癌の手術をインドで受け、1 ヶ月ほど入院して兄弟？叔父？が付き添いに行き大変だったそう。家には女子大生が月 1 万円ほどのアルバイトで家事の仕事をしながら住み込み勉強もしていた。私の山仲間 5 人ほど 10 月に来たら、家に招待したいと言ってくれた。ネパール食のダルバートが主かな。

＊世界一大きい曼荼羅（タンカ）の日本とネパールでの訴訟問題

スダルシャンさんが弁護士として、日本の片桐さんが作成しネパール人が返さない訴訟の裁判で無償でサポートしてくれた。片桐さんが定年後、4 年の歳月と 4500 万円ほどの自腹での制作費用、そして国内外 1 万人以上のボランティアの協力による作成というもの。NHK が何度もテレビ放送した素晴らしい曼荼羅（タンカ）。これをネパールでの展示会後、ちょっとネパールのある男がネパールでしばらく借りる、と言って借りてから以後一切返却しない、という大問題になっている裁判である。

＊カトマンズの宿と 40 年前の協力隊の村の思い出：

40 年前に協力隊で泊まっていた山の村ボジプールの家のカルキ家族がカトマンズに移ってきていて、その家に泊めてもらう予定だったがお姉さんの主人がアメリカから一時帰国していて、部屋がないとのこと。それでトレッキングに行くまでの 5−6 日間は、協力隊当時小学 2 年生くらいでとても小さくかわいい子だったウッタム君が、大企業の勤めるタバコ会社スーリヤネパール社の素晴らしいゲストハウスに私をほぼ無料で泊めてくれるようにしてくれ、広い庭のある豪邸のゲストハウスに滞在させていただいた。

そちらでは一晩、インドから仕事で来ていた人と夕飯が一緒になり、彼の話を 2 時間近く聞くことになった。20 代後半の好青年。彼女の話も長々と 2 時間。でも彼なりに世界情勢をしっかり見て意見を持っている。ウッタム君はまるで頑強なプロレスラーのようにたくましくなった。あの細身で小柄な子が。

ボジプールの家では、おばあちゃんが毎朝一番に私を上の孫のプスカール君の名前で呼んで、チヤカナアウヌースとお茶に呼んでくれた。すったショウガ入りの甘い紅茶。元気なおばあちゃんも 3 年ほど前に 99 歳で亡くなってしまった。正月、カトマンズで会って帰国した 5, 6 日後だった。最後に神様が会わせてくれたのだと思う。40 年前、おばあちゃんが、大勢の近所のおばちゃんたちを指揮して田植え、稲刈りをしていたのを思い出す。

おばあちゃんは敬虔なヒンズー教徒で、家族全員週に一日の断食をやっていたが、おばあちゃんはよく他にもう一日、何の神様の日だと言って断食をやっていた。夕方少し野菜の似たものを食べる断食だ。

40 年前のウッタム君

ボジプールでの田植え

稲刈り

カースト制度があり、私が果樹の剪定鋏をこの山の村でも作れるようにと鍛冶屋に行ってお茶ももらって来たとおばあちゃんに言うと、なんと汚らわしい、という反応だった。鍛冶屋は一番下のカーストなのだ。また、私がバザールの店でお酒を飲んで帰ると、それも忌み嫌うのだった。

ウッタム君は、私が協力隊時代の 40 年前に教えたという、夕焼け小焼けの赤とんぼ、を覚えていてくれた。彼が当時小学校から帰ってくると、畑で取れたトウモロコシを 1 年中食べるように外で乾燥してあり、それを炒ってポップコーンにし、炒ったバトマス（大豆）と共に食べるのが、私も家族も毎日のおやつだった。

その家には、水牛、山羊、鶏、鳩、犬、馬、が飼われていた。ウッタム君は男の子として、鳩を食べるときはちゃんと羽をむしり、潰していた。電気もガス、水道、便所も風呂もない生活。朝、雲が眼下に見えるのだった。でも一家が 20 年ほど後にカトマンズに下りると、母親は毎日家畜もいなく畑もなく退屈だ、山の方がいいと言っていた。

＊盛大な結婚式に招待を受ける：2-3 時間の踊り

日本で働く方がちょうど親戚の結婚式で帰国するというので、私も招待してくれた。10 階建て商業ビル屋上で 800 人も出席するという結婚式に参加。なかなか豪華な結婚式だ。

これはネワール族の結婚式で、初日は招待客が多いが、花婿参列の 3 日目は家族・親戚のみで 100 人程度でこじんまりやるという。参加者は入場すると花嫁と親にお祝いの挨拶と儀礼をする。スピーチ等堅苦しいものはない。家柄がいいのか、大臣・大使らも参列とのこと。私はフランスなどで元大使だったという人と隣に座り運よく話ができた。

ある種族では昼間にしか結婚式を行わないそうだが、ネワール族は夕方やっていた。お酒も肉もたくさん。サリーで着飾った主に若い女性たちが 2 時間も踊り続ける。その活気、おおらかさ。曲はインド系のアップビートなものが多い。日本の結婚式にこんな楽しい気軽な誰でも参加できる踊りはないというと驚いていた。

花嫁と親戚たち。花婿のでない初日。

着飾った招待客

数時間も楽しく踊る

＊結婚式で出会った校長先生から日本語学校の一室を宿にすることに。

結婚式で話しかけてきてくれた女性がいて、その方はカトマンズで一番古い日本語学校、「やさしさ日本語学校」の校長先生。20－30 分日本関連のことなど話して、トレッキングから帰ったら学校の上の部屋に泊めてもらうことになった。日本から日本語教師が来ると滞在していた校長自慢の部屋で、お手ごろに借りることができた。こういう場合によくあるのは、部屋の借り賃は自分で適当に決めて、ということであった。

ただし水、電気、部屋の鍵の問題があった。前の日に屋上の水のタンクを満杯にしていたのに、何かで漏水したのか、トイレもシャワーも水が出なくなって困った。またパソコンの電源がなぜか入らなくなり、困って、いろいろ慌てて人にサポートをお願いしたりしていたら、原因は壁のコンセント自体にちゃんと電気が来ていないことが原因だと分かった。なんとも。部屋の鍵をちゃんとしてドアを閉めるのも工夫がいった。

ただこの校長先生スニタ女史はなかなかの美貌で、週末に旦那さんも連れだって国際マーケットに車で連れて行ってくれたり、最後に空港に見送りに車で送ってくれた。

この国際市場で日本人が日本的お弁当や養殖の魚を販売していた。昔、ハザマ組でネパールで働いていたそうだ。帰国したくなくなりネパールに残ったようだが、商売は厳しい、と言っていた。

＊バグマティ Boarding School で 400 人の児童生徒の前で歌と演奏

Chairman 理事長のシタウラさんに挨拶に行くと明日生徒の前でフルート演奏ください、との話に。翌朝訪問するとなんと朝礼で小学 4 年から 11 年生位の児童生徒が 400 人も集まっていてびっくり。

シタウラさんが私を昔、ミカン栽培指導で山の上の村で協力隊でいて、と紹介し、そしてステージで私の手を取り二人で踊ったりして、いよいよ私の演奏に。ネパール国歌、最も有名な曲レッサンフィリリ、そして日本の歌、さくら、早春賦をフルートで演奏。そして 40 年前に覚えたネパールの悲しい曲アンカーチョピー・・・（目をつむって言わないといけない、胸に石を置いても笑顔でいなければ）を歌った。な

かなか児童生徒たちの反響よく盛り上がってくれた。そして感謝の花輪贈呈や記念品授与まで受ける。どうもいつも訪問するたびにこのような大げさな感謝の儀式をされてしまう。

本校は 10 年以上、山梨の石岡さんの会社が主導する青少年育成交流を行っている。毎年 10 名弱の生徒が山梨県に招待されている。山梨の石岡会長の紅富士太鼓チームも演奏に来続けている。

7 月にさっそくネパール日本友好協会のシタウラさんなど 5 人が来日され、その時にバグマティ校の生徒が自分たちも日本の歌を覚えると、さっそく先生や YouTube で数曲覚えたとのことで、早く私の来訪を待ち望んでいるとも。

この学校に日本語教育を、という理事長と日本側で話はよく持ち上がるがなかなか実現しない。一方、中国が無償で中国語の先生と授業を提供し授業カリキュラムに入れる提案があるようだ。孔子学園政策か。

＊シタール奏者ススマさんの SEWA の会が教育支援する 4 校訪問：

ススマさんはインド政府奨学金を得てインドに 6 年間大学でシタール演奏の勉強に留学された。そして日本人と結婚し 50 年ほど前に来日。日本でシタール奏者として活躍され東京芸大でも教えられた。

25 年以上前から SEWA の会として、恵まれない子女が勉強を続けられるように支援活動を始められたが、もう 70 代後半となり、コロナの数年間活動が止まっていたので私が再開のためにもサポートすることとした。

カトマンズ南の近郊の 5 校の生徒に今まで支援してきており、今後の活動のため訪問した。現在はネパールは国として無償で教育ができる施策が広がり、今後は SEWA として障害者を対象にする方針にするか検討する。

郊外で家が増えている地域の学校で生徒数が減少しているとの話があり、理由を聞くと以前はひと家族に 4 人ほども子供がいたが最近は子供を一人しか産まなくなってきていることが原因とのこと。教育費をしっかりかけるようになっているためもあろう。公立学校はレベルが低いため、多くの親は高額の費用を掛けてでも私立の学校で勉強させようとしている。

この公立中学・高校で驚いたことは、全国に無償配布された 11 年生の化学の教科者は、ネパール語と英語の完全併記であり、これなら英語教育も進むはず、と思った。かたや日本の英語教育は！

10 年以上前に Private school の Little Angels 校の学芸会で民族ごとの踊りの演目があり、ステージで司会者の女生徒が、説明に英語とネパール語の両方で滑らかに話していて驚いた。日本ではありえない。

＊竹笛バーンスリ奏者、シタール奏者に再会：

国立トリブーバン大学を卒業し、バーンスリ奏者として日本はじめ欧米、台湾などで演奏活動を行ってきていて、キルティプールの Music School で教えているラーマンさんを再訪した。東京のエベレストインターナショナルスクールで踊りを教えているラクシミ・ケシさんからキルティプールの妹さんのプージャ（意味は祈り）さんに土産を届けに行ったところ、近所に竹笛奏者がいると会わせてくれた。

ラーマンさんは、南のタライ平原地方でインド要人に演奏してきた直後とのこと。近所の中学生がバーンスリを習いに来ていた。奥さんとプージャさんはとても仲が良い。奥さんは学校で踊りも教えているそうだ。

私もフルートで日本の曲、山口百恵の「秋桜」、そしてネパールの国歌と昔から有名な国民曲「レッサンフィリリ」を演奏した。3 年ほど前に「荒城の月」をラーマンさんと 2 重奏したこともある。この曲と沖縄の曲、「島唄」はラーマンさんも気に入ってくれた。

シタール奏者のサテンドラさんにパタンで再会。彼もスルスーダというグループで銀座に演奏に来たり、欧米で演奏ツアーに何度も行っている。以前は、会うと 2 時間ほどもネパール語で一生懸命、ネパールの社会問題、世界の先進諸国のネパール援助と日本の最近の援助の減少などたくさん話してくれた。一日 7, 8 時間シタールの練習をしないとレベルを保てないそうだ。彼はインドにシタールを学びに留学している。10 年ほど前に私をバイクで一日バクタプール、カトマンズ大の音楽ハウス、ヒマラヤが見えるナガルコット等に連れていってくれたり、シタールの演奏会に招いてくれた。シタール演奏は聴衆の様子を見て、一晩中演奏したり、聴衆が眠そうになっていると早めにクライマックスに持っていき終えたりするそうだ。

ネパール・インドの音楽にはサレガマパダニサという 7 音の音階はあるが、西洋的な音符とは合わない。楽譜がないまま名曲が代々受け継がれているようだ。それで国民的な歌も時代、地域でメロディーや歌詞が少し違ってくるようだ。

・サテンドラさんもグループで日本のフジロックに参加し、演奏している。

＊日本語学校訪問、日本に来た留学生たち

・JLECC 日本語学校：

私学では最高峰の日本語学校。昔はハイレベルの日本語学校がたくさんあったらしいが、需要がないようで、JLECC くらいになっているようだ。

アルナ校長先生は 20 年以上も前に学校を設立したが、日本で日本語をしっかり学び大学も出たのにネパールに帰国してそれを生かして働く場所がない、と落胆した。また日本に戻ろうかとも悩みながらこの日本語学校を設立して今のように大きく発展させた。インド人の旦那さんがいて、声がきれいでカラオケが大好きという。ネパールで日本語のスピーチ大会に入賞者を多く出したり、またカラオケ大会を開催している。知的な明るいやり手の女性だ。

右の日本人女性は朝日奨学生対応。続いてアルナ校長、スダルシャンさん、ビノドさん、日本語学校運営するアシスさん、私。

新潟は十日町出身の渡辺さんは、おおざっぱなネパール人ときちんとした日本の間に入って毎日神経をすり減らしているとか。

ネパールの多くの日本語学校は、半年で日本語レベル N5 まで教えて、どんどん大量生産のように日本に送り出して儲けようというところばかり増えたようだ。なにしろ一人日本の学校に合格して日本に行けると日本側から 10 万円稼げる。10 人なら 100 万円だ。JLECC は高度な日本語をしっかり教えていて朝日奨学生 55 人枠のほとんどを合格させているとのことだ。朝日奨学生は東京地域で毎朝朝日新聞を配達

し、その代わり日本語学校 2 年間、大学 4 年間の授業料を無料にし、宿を提供し、生活費 10 万円ほどを得るものだ。週休 1 日。しかしその生活は厳しく、深夜 12 時から新聞の折り込み作業開始、300 軒ほどに配達を終えて、朝 5 時半ころ仕事を終える。7 時半には家を出て大学に通う。月末の集金を完了させるのも大変だ。それでもお金が掛からずに日本で 6 年間も学べるので競争率は 3 倍もあると言う。

アリサさんという女性の場合、夕方 8 時くらいにしか寝ないので、毎日 3 時間ほどの睡眠だったという。その彼女もネパールでは 8 時間ほどゆっくり寝ていたそうだが。ネパールでは医学部に合格していたが、4 人兄弟の末っ子で親にお金の負担はかけたくないと、お金がかからずに学べる朝日奨学生に応募した。日本の医学部に入れるほど日本語ができないと判断し、IT を学ぶ上野の大学に入った。

彼女は卒業時に日本での企業の収入が少ないとか残業が多いとかの情報からカナダの大学院で IT を学びながら IT の仕事をできる道を選んだ。日本の IT 企業に入っても月給は 20 万円程度、カナダならその倍以上はありそうだ。働きながら大学院にも行ける時間の余裕があれば最高だ。

また彼女は日本で出会ったネパール人の彼氏と結婚し、一緒にカナダに移った。彼は箱根のホテルでネパール人従業員をマネージする仕事を忙しくしながらアメリカの大学院の勉強を仕事の合間にオンライン授業で受け、卒業して結婚した。素晴らしい。日本から見れば夢のようだ。

しかしアリサさんの両親はラメチャップ郡の山村から出てきて、16, 17 歳で結婚し、小さないろんな店で商売しながら 4 人の子供を育て上げた。アリサさんのお姉さんはドイツに留学し、経理の仕事でベルリン空港内で働いているそうだ。二人の兄は日本と韓国で働いている。

優秀な移民を大いに受け入れる政策、制度が充実していて英語で学び働ける、カナダ、オーストラリアはネパール人には行きやすい人気の国だ。日本は給与の安さ、残業、そして何より日本語の壁、外国人を採用したがらない国民性という大きな問題がある。今はまだネパール人には日本は人気がある。今のうちに大いに日本に来てもらい快適に学び働ける環境を作ってやることが日本の生き残りのためにやるべきことと思う。

タイでも部長級になると日本より年収は上回っているという。ベトナムやタイで日本語を教える人から聞いた話では、自国でも日本語を学んでそれなりの収入の仕事があり、わざわざ日本に行って苦労することはない、と思う人が多くなっているそうだ。それらの国では 1 番に韓国、2 番に台湾、それらの後に日本が人気とのことだ。

アリサさんの兄弟姉妹 4 人は、跡取りの長兄が韓国で働き、次男は成田空港で働き、お姉さんはドイツ語を学んでドイツの大学を出て、ベルリン空港で経理の仕事をしている。お姉さんに日本で会って話したところ、ドイツが日本よりずっといいという。多分給料の高さ、外国人の受け入れ、女性の平等化、休暇が多く、残業の少ない労働環境、意見が言いやすく議論が盛んな社会、等の要因があろう。

JLECC で学び、朝日奨学生で日本の大学を出たけれど、結局オーストラリアに行って働き結婚した女性がいる。オーストラリアには日本のような伝統文化もないけれど外国人には自由と平等感があるのだろう。こうしてせっかく日本で学べるように奨学金制度があっても外国に取られてしまう状況もある。

・Akushala 社：

創設者のギリさんは、N1 取得し 10 年ほど日本で学び勤務後、帰国し日本語学校を主体にした会社を設立。日本への就労・留学サポートをする。帰国後、1 年ほどか日本の IT 企業から IT の仕事を請け負う 6

人ほどの監督、連絡係の勤務をしていたが、自分の会社を設立した。ネパール人はサラリーマンでいるより、独立する気概のある人がとても多いと感じる。日本においても特にネパール料理店で独立する人が多い。日本の社会にこの挑戦する人たちをもっともっと受け入れるべきと思う。

＊国立トリブーバン大学、日本語学科：

坂本みどり先生と男性の先生が教鞭を取る。坂本先生はネパールでの日本語教師は 25 年以上に及ぶ。ネパールでは収入は得られないボランティアという形だそうだ。ネパールでは外国人が働く場を得ることはかなり制限があるようで、日本語を教えるだけというような、ネパール人でもできる仕事とみなされると、その職は外国人が得ることは難しくなっているそうだ。20 年ほど前からずっと日本人には日本語教師を職とするビザを下ろされていないそうだ。坂本先生は昔取れる時代にとって、それを大事につないでいるとのこと。

それで今までに日本語教師で入ってきている人たちはボランティアとして、大学の留学生という形で入ったり観光ビザで来て教えてきているそうだ。このような閉鎖的なやり方でネパールが発展するわけがないと感じる。この狭い発想はどうしたものか。

本大学からは日本語レベル最高位の N1 合格 6 名が今年出たという。先生は日本からリモートで教えていたのに。私も以前一度授業を参観してみたが、鎌倉時代の歴史について先生が学生に質問し、生徒がしっかり封建制がどうとか回答していた。なかなかレベルが高いと感じた。

残念なことは、そうした優秀な学生の就職がネパールにはなく（ネパールに進出している企業が極端に少ない)、直接日本にある日本企業に大卒レベルの就職ができる道もないことである。それで私のような者がボランティアで、新潟の自動車整備の新潟工業短大、金沢のアリス学園の介護専門学校への直接入学を案内・世話して来ていて、希望者が何人か入学できているのである。新潟の短大は外国人に授業料を半分にしている。2 年で卒業、就職ができ、卒業生は就職率 100%が 5 年以上続いている点が魅力だ。金沢の専門学校では卒業後に 5 年間関連施設で働く条件で授業料は無料になるという奨学金制度がある点がひきつける点だ。

新潟工業短大は、近年日本の高校から入学してくれる学生がとても減っていて、外国人をどんどん受け入れないと規定の定員を割り、定員割れすると国から補助金を受け取れなくなり経営破綻するという危機的状況に置かれている。それで外国人は多少日本語ができなくても授業料を半額にしてもでも受け入れて 2 年後には国家試験に受かるようにしっかり教えている。

残念ながらベトナムやネパールの学生は授業料支払いが遅れ、ついには卒業、就職してからも未払い授業料の支払い請求を行い続けなければいけなく、現在総額 2,000 万円も累積していて、大学経営の存続に関わる状況という。授業料支払い遅延の理由の一つは、ネパールが国として外貨を外国に出す制限を掛けていて、学生の親がせっかく授業料を振り込もうとしてもネパール政府が送金制限を掛け、大学は授業料をいつまでも受け取れない問題も出ているという。私はこの短大に合格し明日日本に向けて出発だというシャクティ君にパタンの日本料理おたふくで坂本先生と共にお会いしご馳走して激励した。コロナで入国が遅れていて念願の出発、入学だ。数年前に一度日本の日本語学校で入国申請して入管に拒否されている。

金沢の介護専門学校に N2 の 35 歳女性インディラさんが去年年末にオンラインインタビューに合格しやっとこの 5 月に来日・入学できた。日本に来たい気持ちの方が介護の勉強や仕事よりも強いようで、学校側は、介護という精神的、肉体的に厳しい仕事に 5 年以上耐えられるだろうかと心配していた。今のと

ころ問題なく勉強に励んでいるようだ。

新潟の長岡の介護専門学校に同様な奨学金を受けて入学、卒業、そしてこの 4 月から介護職で勤務開始したア二ワルさんにお盆に帰省した時に会ったところ、後輩ネパール人も 7 人入学し、自分は近いうちに中古の車を買って夜勤もできるようになりたいとのことだった。月給 15 万円ほど。なかなか厳しそうだが、あと数年後にはネパールに帰り、ネパールで介護の会社を作り広げたい、との抱負を語っていた。ネパールでも年寄りの介護の需要が出てきているようである。なにしろとても多くの若者が外国に出ていくので。

＊日本への技能実習生・特定技能送り出し機関・オクソン社、訪問：

7 年前に設立。日本語学校も運営。語学教育が好きな日本人女性とネパール人男性の夫婦による共同経営。この 1 年ほどで 250 人ほど送り出し確定。コロナ禍にあった 1 年前の春に一時的に日本に送れる時期があり、そしてまた今は 1 年のブランク後に堰を切ったように送り出せるようになった。主人は名古屋で 1 年半ほどいたが、日本の水に合わないと思い、ネパールの自国で創業した。

介護で日本出発が決まっている女性たちの授業を見学、なかなか活発。評判呼び学校校舎大増設中。コロナ規制緩和が今春にあり一気に日本へ行き始めた。

日本に技能実習生で建設業務（山梨・屋根修理等）に行くことが決まっている 2 人に日本料理屋にて受け入れ企業の計らいで会って話す。日本語で受け答えがあまりできないので驚く。これで仕事や生活は大丈夫だろうかと心配になる。介護職で行く人は日本語能力 N4 が必須なのでまだ日本語はそれなりにできていいのだが。

＊Civil Engineer 31 歳、就労ビザで日本へ：

ネパールの大学の工学部で学び専門を生かして図面作成業務の公務員をしている 31 歳の男性が日本企業に採用になり、日本に行けることになったとのこと。数か月前から日本語を学んでいるようでお会いしたが、この日本語レベルで日本社会に入ると大変だなと思った。仕事自体は英語でできるかもしれないが。これから数か月後、ちょうど日本へ出発の頃、赤ちゃんが生まれる見込みで顔を見られない可能性も高い。それでも旅立ちはするとのこと。

（図面作成業務で日本語高水準不要、4 年生大学卒は企業が採用すれば就労ビザを取れるそうだ）

私から、日本の習慣、たとえばネパールでは“ごめんなさい（マフガルヌース）”は、相当なことがないと言わないが、日本では特別なことがなくても“すみません”をよく言う、こと等を伝えた。

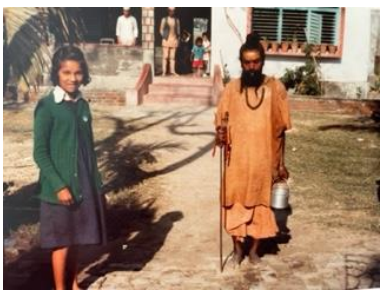
＊40 年ぶりに再会した当時 7 歳の子：

協力隊時代のボジプール・ダワのパダムさんの娘ニマちゃんと祖父

当時 7 歳の子だったニマちゃんが是非是非 40 年ぶりに会いたいということで、急遽会うことに。ボジプールの山の大斜面の村ダワで私と果樹栽培指導を一緒にやっていたパダムシュレスタさんのお嬢さん。パダムさんは私の推薦で 9 か月間、愛媛県の果樹試験場で研修を受ける機会を得て、また日本中を研修の名目で旅させてもらったそうでとても楽しかったと言う。

その娘さんは結婚して娘が生まれてすぐにイスラエルに介護の仕事で行き､15 年働いてきたとのこと。娘は親に預けて、5 年に一度しか帰国できなかったそうだ。娘に会いたかっただろうに。イスラエルに行くのに言葉は 2，3 言しか知らずに出発したが、独り住まいの 8－90 代の老人宅に一緒に住み、半年で言葉はできるようになった、娘のようにかわいがってくれ、歌ったり踊ったり、とても楽しかったと。月に 15 万円ほどの賃金だったそうだ。日本に特定技能の介護で働きに来ている人の大変そうな話に比べるとうらやましいような話だ。日本もそのようにできないのだろうかと思う次第だ。

＊40 年前に一緒に働いた果樹苗木屋の大地主と再会：



40 年前、苗木屋のトーラン氏家族　ビラトナガール自宅前で

40 年ぶりの再会　トーラン氏とカトマンズの家で

息子の嫁さん（歯科医)、長女

トーラン氏と次女

青年海外協力隊で柑橘の栽培指導で 2 年間いたボジプール郡、そこで大地主として果樹の苗木作りをトーラン氏はやっていた。ボジプールは、バスの通る町ダランから歩いて二日かかる。当時も山のピョウレとタライ平原の町ビラトナガールに家がふたつあったが、今はカトマンズとイギリスにも持ち、4 軒の家持になっている。カトマンズは末っ子の息子がネパールの医療界を取り仕切るような男となり、一緒に住める家を建てたようだ。イギリスの家は 3 番目の娘が自分の兄と同様に英国で医師となり、家を建ててあげたという。どうしてこんなにみんな優秀でお金があるのか不思議である。ネパールは農民など貧しい人がほとんどなのに。

トーラン氏は真摯にヨガの精神を愛し、40 年前には一緒にインドのヨガ道場に行ったことがある。今回訪問しても、彼はヨガの呼吸法をやったり、バガバッドギータのような聖典を習慣的に読んでいるという。二人の娘さんがちょうど滞在していて父親ととても仲がよく親を尊敬している。小学低学年でかわいかった少女たちが立派なご婦人になっていた。一人は映画界の女性 No.1 で 100 本の映画を製作したという。40 年前に私がバトミントンを教えてくれたと懐かしそうに覚えていてくれた。一人は旦那さんが US で韓国の携帯会社勤務、母親として子供の教育のため子供とネパールにいるという。アメリカはなんでも忙しくてよくない、と。私にも、今度は数日ゆっくり来て楽しくすごしましょう、と言ってくれた。

トーラン氏は、10 年ほど前、一時山の土地をマオイストに制圧されていて全てなくしてしまった、でも子供たちだけはよく育ってくれたと話していた。

協力隊時代にこのピャウリ村の村長の息子の結婚行列が山々の道を 7 時間かけてあり一緒に参加した懐かしい思い出がある。花嫁の村から 16 歳の花嫁ひとりが金の冠に赤い衣装で白馬に乗り、花婿とその村の人々が一緒に山越え谷を越えて行列を行く。ちょうど稲刈りの収穫を終えた時期。ピピーパパー、ラッパとシンバルを鳴らし、標高 1,400mの村から 1,100mの谷、また登って 1,900m の丘陵に、そして 18 歳の花婿の村まで 7 時間の行列。花婿の村に着くと夜を徹して村人たちが新郎新婦に祝いに訪れる。

40 年前、白馬の花嫁と
7 時間の結婚行列　標高 1900m

祝宴は稲刈り後の段々田んぼで。呼ばれた 3－40 人の村人が丸座に座り、葉っぱで作った皿にご馳走の肉と白いご飯が山盛りに出される。肉、ごはん、それ自体がご馳走なのだ。肉は普段、鳥や水牛、豚、鳩をつぶさなければ食べる機会はない。種族により食べられる肉が違う。普段はコメのご飯は 2 割くらい、あとは真っ黒で消化が悪くあまりうまくない四国ビエ（コード）のムギ焦がし（ディーろ）を食べる。

当時、私が水にやられて腹を壊し、村の巡回のために 8 万円で馬を買い、世話のために馬子を雇っていた。馬子は 17 歳くらいの男子で、私のために月 2,500 円で炊事、洗濯、買い物となんでもやってくれた。この馬が最後に足を悪くして、日本に帰国する時に、トーラン氏が買い取ってくれた。

トーラン氏と山の村を歩いていると、30 代の女性が病でもう生きられないからと家族らが彼女の周りで泣いていた。村の風習で、村の呪い師が病気でもう死ぬ、と宣言すると、家族はそれを信じてもう食事を与えず、病人の周りで泣き続ける、ということであった。そこで村の有力者のトーラン氏が、ちゃんと食べさせれば治るから食べさせなさいと諭し、家族は言うことを聞いて食べさせ後に回復したそうだ。山深い村には医療が届かず、このような風習で村人が生きている現実があった。

40 年経って今はボジプールのバザールに道路も電気も通じて、ホテルもあるそうだ。昔は、電気も、ガスも、便所も、水道も、自転車に乗る道もなかった。新聞もなく娯楽はラジオだけだった。

一方、今、バザールから 1，2 時間も歩いた標高差 900m もある大斜面の村々は、若者がカトマンズへ、外国へと働きに行く波がすごい勢いで押し寄せている。若者が減って田畑は荒れ、斜面の村に人は住まなくなったというではないか。私の思い出の農業で貧しくも平和に生きていた人々の村はどうなってしまったのだろう。

＊一回忌で大勢の人々が参加：

40 年前の協力隊時代のボジプールの村の有力者の 1 回忌がカトマンズで行われ、たくさんの知り合いに会えるからと連れて行ってもらった。ボジプールの山の村ダワからカトマンズに移り住んだ 50 人ほどの人々が 2 階に集い、3 時間お経をあげていた。黄、赤と色とりどりの花々が積まれ、お香が焚かれ煙が満ちる。1 階でも黄色の衣装の僧ブラーマン 5 人が火の回りに胡坐をかいてサンスクリットのお経を唱えている。日本のようにきちんと背筋を伸ばして神妙にではなく、ゆらりゆらりと経を唱えながら。中年の女性たちはやや太めの体に赤いサリーを纏っている。

私も 20 年ほど前にたまたま参加できた結婚式で花婿だったロッチャンさんに会った。40 年前にビラトナガールのトーラン氏の家で会ったときはまだ 5 歳くらいでそれは、それは愛らしい男の子だった。今は医療界の重鎮だそうだ。40 年前に私が村の家で果樹の取木・接ぎ木の指導していたのを覚えていて懐かしむ学校の女先生が声をかけてきてくれた。20 代の細身の女性が日本語を流ちょうに話すので聞いてみると、日本で育ち、専門学校で勉強し、今は川崎あたりで歯科衛生士をしているという。私が 31 年前に渋谷で結婚式の 2 次会をネパールレストランのカンティプールでやり、その主人がダワ村のプレムシュレスタさんだったというと、知ってる、知ってる、と言っていた。

一回忌の後の食事が用意されていたが、お酒はなく菜食料理だけだったが、ヨーグルトや野菜料理はとてもおいしいものがたくさんあった。

祈祷するブラーマン達

何時間も祈りを捧げる

ボジプール出身者と

左：Toran 氏の息子（医師）

＊ランタン谷トレッキング：

・43 年前のランタンのトレッキング、インドでのヨガ道場の思い出：
大学時代に休学して 22 日間歩いてから 43 年ぶり。キャンジンリ 4600m までたどり着く。

高校時代からヨガに興味があり、インドにヨガを 3 か月習いに行く前に、ネパールでヒマラヤトレッキングにて足を鍛えようと思った。カトマンズの空港に降り立ち、医学部卒で医師になる前にヒマラヤを歩こうという日本人に出合い、一緒の宿、さらに一緒のトレッキングとなった。彼は大学で山岳部だった。本来、彼は 5,000m を超えるガンジャラ峠超えを目指していたが、もう 12 月で降雪があり、私も一緒ということもありあきらめて 4,600m のゴサインクンドの峠超えに変更した。ゴサインクンド峠には大きな池があり、池面に移る雲や、下に仰ぎ見る山々、斜面の家々が印象的だった。峠に宿はなく、大岩の下でテントを張り寝袋に入ったが寒くて十分寝られず歌謡曲が頭をめぐっていた。

インドではボンベイの内陸のロナワラのヨガ道場で 1 か月、プーナで中流インド人家庭に 1 か月ホームステイしてラジネーシのヨガ道場や哲学主体のヨガ道場（欧米のヒッピー的な若者が大勢たむろしていた）に通った。プーナではホテルに最初泊っていて、歩いていると大阪万博に行ったことがあるという紳士に声を掛けられ、彼の自宅に 1 日 3 食付 900 円ということでホームステイすることになった。日本人の長期滞在は私が 19 人目だそうで、中にはインド史の研究者が 1 年住んでいたことがあるそうだ。インドは貧富の差が大きく、カースト制。一般に人々は菜食主義で、食堂の 1 割くらいに Non-vegetarian が見られるくらいだった。彼の家の家業は印刷用印字作りで中流ながら、下のカーストの親子が毎日流しの外で皿洗いに来ていて、カースト間の人の上下に驚いたものだ。
ネパールの当時のトレッキングでは、泊まる宿には木のベッドはあっても、布団などなかった。日当は、シェルパに 700 円、ポーターに 300 円程度でポーターには食事は提供不要だった。ポーターは布袋に小麦焦がしの粉を入れてそれを食事時に口にするだけで、水でこねるわけでもなく手で食べる。うまいかと聞くと、うまい！とにっこり笑顔で答えていた。雪もある峠越えに際しサンダルしか履いていないので、なんとか靴を用意した。
当時、シェルパから習ったレッサンフィリリという歌が、いまだにネパールでの人気のある曲であることは驚きだ。楽譜がないので、当時覚えたメロディーや歌詞と今のものは少し違ってきているように思われる。本来、歌は人の生活と共に変わっていっておかしくないものかもしれない。地域での違いもあるのか。

・今回のランタントレッキング：全行程 10 日間
2022 年 6 月 8 日カトマンズ発ジープでシャブルベンシ。8 日間歩行。
登りの宿泊先：バンブー、リバーサイド、ランタン、キャンジンゴンパ 2 泊。キャンジンリ登頂。
下りの宿泊先：リバーサイド、シェルパガウン、シャブルベンシ。6 月 17 日カトマンズ着。

雨季（6－9 月）なのに 8 日間昼間雨なしでとても幸運。一方、夜は 4 回降られたが。

＊トレッキング記録　詳細：2022 年 6 月
1 日目：6 月 8 日 6:20　宿にガイドが迎えに来てタクシーでバスターミナルへ 550Rs
7:15 乗合ジープでカトマンズ発 1,200㎞。14:00 頃シャブルベンシ着 1,460m　泊り。
途中ランチ。ドゥンチェは 3－4 階建てのホテル、ビルがたくさん

2日目：6月9日 6:20 シャブルベンシ発 1,460m。ドミン経由、12:20 バンブー着 1,960m　ホテルチベット
小さいダム建設工事。黄イチゴあり。蛭のジュガが手の甲について1時間半出血。
ガンジャラ：乾燥してタバコに混ぜて吸うそうだ。米から20日間でチャン（地酒）を作っている。
ガイドのヌルブさんの村では、赤ちゃんが泣くと少しチャンを口に含めてやると寝付いて母親が
仕事ができるそう。子供出来ない人は兄弟の子を預かるそうだ。夜中ずっと雨。細い竹。

3日目：6月10日 7:15 バンブー発 1,960m　8:20 橋わたる：グミあり　10:10 Rimche 2,440m
10:50 ラマホテル 2,420m：ランチ。韓国の来訪記録あり。オランダカップルと再会。
リンゴ 150Rs 小さく高い。30 cmの蛇。しっぽの切れたトカゲが日向ぼっこ。
13:00 リバーサイド（Gomnachok）着 2,670m。うすいチャンを二杯。ランタンⅡ見える。
ダライラマ飾られている。

4日目：6月11日 7:30 リバーサイド（Gomnachok）発 2,670m　9:45 Ghora Tabera 3,020m 閉まっていた。
牧場で牛乳 150 x 2　10:36 Thangshap　Rasuwa 3,200m 花畑　ぜんまい様　赤イチゴ
14:30 Lang Tang 村着 3,500m　500m 幅の地震での崩落　7割営業停止状態（コロナ、雨季）
Glacier Hotel 1歳の赤ちゃん　75のお婆ちゃん　地震記念館（195人死亡）
オランダカップルのタイ出身女性がへたばり、翌日停滞

5日目：6月12日 7:30 Lang Tang 発 3,500m　少し晴れ間。Mundu。Thangshap。
11:35 キャンジンゴンパ着 3,830m
6日目：6月13日 6:10 キャンジンゴンパ発 3,830m　快晴4時間かけてキャンジンリ 4,600m 登頂。
豪州人と犬も一緒に登った。
12:00 過ぎ キャンジンゴンパ着 3,830m　ゴンパで祭り　五体投地

7日目：6月14日 ガス　7:10 キャンジンゴンパ発 3,830m　9:20 ムンドゥ 3,530m
10:00 頃ランタン Glacier hotel 家族写真　12:10 Thang Shap オニオンスープ
13:00 ひと眠りして出発　リバーサイド手前の原生林で猿の集団15頭ほどに会う。
ダウラギリのマガルーは猿を食べる？　荷運びの馬の肉は食べないらしい。
15:00 リバーサイド 2,670m
フルート吹くと親戚のシェルパガウンの親父が de-raira-muro 素晴らしいと言う。ネパール歌も

8日目：6月15日 夜中雨　朝上がる　7:30 リバーサイド発 2,670m　晴れ　9:25 Lama hotel 外国人まだいる
9:40 Rimche 着 2,440m　主人のの話、地震時の家の被害、トレッキング中イスラエル人死亡も。
12:05 Sherpa Gaun 着 2,563m　Namche hotel ぐみ食べた　いろいろな蝶、花。鳥の鳴き声
水牛にアルコール分のない発酵チャンを大鍋で飲ませている

9日目：6月16日 7:20 Sherpa Gaun 発 2,563m　反対の斜面に Thulo Shabulu が見える。
10:20 Khanjin 村 2,280m の下の方のホテル着　チヤ 50Rs x 2
Hyundai のショベルカーで道路を造っている。リンゴ植えてある。実は小さい。
トウモロコシ（マッカイ）畑あり。四国ヒエ。ジャガイモ畑、と下に来ると豊か。

チベットに行く道が見える。11 時から会議あると急ぎ歩く人。
12:00 シャブルベシ着 1,460m　他のホテルでビールとチャオチャオ（焼きそば）

10 日目：6 月 17 日 7:10 シャブルベシ発 1,460m　乗合ジープ。道が泥んこでデラックスバスに遅れる。
ドゥンチェ 1,950m で遠くにヒマラヤ見える。女子高生が乗ってきたが、曲がりくねった山道で車酔いで吐く。山の小中学生が大勢車道を歩いて家路に向かう。ガイドのヌルブさんにチップを弾む。
14:00 カトマンズ着　　タクシー1,000Rs でゲストハウス経由、新しい宿に荷物を運ぶ。

・ガイド兼ポーターの話：

私のガイドのヌルブ・シェルパさんは 25 歳既婚。５年前に八王子の片倉台山の会が中心の５人のエベレスト・ガラパタールのトレッキングでポーターをやっていた。今回は、ガイドはポーターも兼ねて、ガイド料 1 日 1500 ルピー（1600 円ほど）。ガイドもポーターもトレッキングがない日々は無給という。日雇い労働だ。雨季は仕事がとても少なく、また真冬もトレッカーが少ないので大変だ。最後に 10 日間分のガイド料にチップとして二日分ほどお例にあげるととてもうれしそうだった。

ガイドになる研修は 3 年ほど前に冬の 1 か月間受けたそうだ。年間 400 人もが受講しガイドになるそうで、他の仕事がないことを象徴しているようだ。日本に留学し日本語検定 N1 の最高レベルを取って日本企業で働いていたギリさんもガイドをしていた。（日本語ガイドでは 1 日 1 万円の時もあったそうだ）

ヌルブさんの奥さんはナムチェバザールでコックをしていて出会ったそうだ。奥さんは学校に行っていないとのこと。カトマンズでの家賃 8000Rs（9000 円弱）, 3 歳の息子の幼稚園 2500Rs（2700 円）/月、出産時の出費は入院費含め 10 万円ほどとのこと。年間収入 20 万円強ほどか。厳しそう。家を建てる見込みなどたたないと言う。

ヌルブさんは 10 年生までしか勉強していないので、日本の高卒基準（12 年間）を満たせず、日本の専門学校などには入る資格がない。それで日本語レベルが低くとも日本で仕事につきやすい技能実習で建築業務という道があると言うと、興味と希望を持ってくれた。月給 15 万あれば、アラブで 5−6 万円よりいい、という。日本の技能実習制度も人道的な面で問題があると聞くが。

ガイドのヌルブさん

ラマホテルで一休み

・カトマンズから乗合ジープで 7 時間（途中ランチ）：

トリスリバザールからシャベシルベンシまで 43 年前は 4 日間ほど歩いたが、今は車で行けた。カトマンズから乗合ジープに乗ったが、運転手は毎日山の町との間のすごい山道を毎日 7 時間くらい行き来する単調

さに、インドの歌などアップビートな曲をがんがんと大音響でかけていた。うるさいことこの上ない。乗客のネパール人たちが気に入った歌だと、声をそろえて歌ったりする。標高差が数千mある大渓谷の道を前の車をひたすら追い、クラクションをガンガンならして恐ろしい追い越しを常に試みる。このスリル感が毎日単調な仕事に刺激を与えているような。シートベルト着用義務は運転手だけだ。ところがこの運転手は警察に指摘されてもハイハイ、とごまかしてシートベルトをしないで済ます。客の一人が安全のためにちゃんとしろよ、と口げんかになったりする。シャベルベンシの手前のドゥンチェは、昔はのどかな村だったはずが、3－4 階建てのビルと店、ホテルが立ち並ぶ町になっていて昔の面影もない。

シャベルベンシの村に着くとトレッキング出発地点でもあり、宿が多く、トラック、バスがあり、若者はバイクを自慢げに乗っている。宿に入るとガイドはさっそく川沿いの野天温泉に行った。宿のホテルにコロナ前まで埼玉のユニクロで 3 年ほど働いていた女性がいた。コロナになり仕事をやめさせられ帰国したそうだ。30 歳になり村の同級生たちはみんな結婚してしまった、自分はまた日本に行きたいが、と言っていた。

散歩すると、村の事務所の看板に、20 歳になる前に子供を産むと罰金、というようなことが書いてあった。人口抑制、貧困を避ける国の政策か。

・トレッキング出発：

歩き始めると小型ダムも建設中であった。昔は電気が通じていなかったが、今は全てのトレッキングルートの宿に電気はあった。水洗トイレも相当普及していた。ただペットボトルなどのリサイクル活動はあった（一本回収で 1 ルピー）が、すべて歩いて運ばないといけない山岳地域でもあり、回収は難しそうだった。

1 泊目の宿は、大渓谷の底で激流が流れ落ちる川の横。バンブーと言うだけあり、細い竹が群生する。ハッシッシーの麻薬も植えられていた。タバコに少し混ぜて吸うらしい。チベット系の大柄な主人。雨季でもあり夜中に雨が降ると、トタン屋根だけの天井はガンガンとなり続けた。ところが朝起きると快晴。

翌日、深い渓谷を登ってたどり着いたリバーサイド。宿が一軒だけだが、主人が言うには、ここは国立公園に指定されていて、宿も部屋も増やすには許可がいるので増やせない、とのこと。宿の周りの草木も伐採の制限があるそうだ。一方、最奥のキャンジンゴンパは民間の土地のため、ホテルが林立してしまっているのだそうだ。

馬を放牧していた

チベット系のホテルのキッチン

牛が放牧されていた。生後数か月の子牛

ランタンやキャンジンに向かって人が、長さ 4m、70kg もある材木を運んでいた。本当にこの地元の人々はたくましい。そして穀類などの物資をロバが背に担ぎ、鈴を鳴らして隊列で上の村に運んでいた。その馬の新鮮な糞が歩く道にぼてぼて落ちていて臭いもしっかりある。

リバーサイドの宿では、馬が 20 頭ほど泊って休み、宿の周りの草をむしゃむしゃと食べていた。朝はトウモロコシ等が入った袋を頭から口いっぱいに掛けられ、食事をしていた。隊列に若者がひとり指揮を執っ

ていた。こうして運ばれたビールは上の村では 1 本 1000 円ほどの高値になっていた。（カトマンズなら 400 円のところ）

キャンジンゴンパ近くで

ランタン谷の花

リバーサイドの宿：このテーブルで笛演奏

・川べりの宿で聞いた若女将の話：

標高 2800m ほどのリバーサイドの一軒宿。標高 2700m 位。主人は元チベットから逃れてきたシェルパ族。なかなかいい男だ。夕食後、2 時間もフルートを吹いた後もストーブがあるので離れの食堂にいると、若奥様がやってきて話が 20 分ほどできた。奥さんは 21 歳で 3 歳の息子さんがいる。もう夜 9 時。彼女から、「息子は 6 歳になるとカトマンズの学校に行かせないといけない。旦那は体が丈夫だが、自分はカトマンズ育ちでよく病気になり、ちょくちょくカトマンズの病院に行かないといけない。

カトマンズには両親と姉妹、弟達が何人もいて、賑やかでとっても楽しい。喧嘩しても 10 分もするとまたみんな笑顔で話し始める。姉は機嫌を損ねると何日も話さなくなることがあるけれど。家族といると友達と会わなくても、とっても楽しく過ごせる。ご飯も自分は気の向いた時に作るだけでよい。カトマンズに行くと 3 ヶ月くらいいる。旦那もよく一緒に来る。1 年の半分くらいカトマンズにいる。山のホテルに嫁に来た時には、自然のなかで山ばかり見て過ごすのもいいと思った。山にいるとセカセカ働く気分にならない。」と話してくれた。この若いお嫁さんがカトマンズに出ている間は、歩いて 1 日のシェルパガウン村の姉夫婦が宿の仕事を引き受けているそうだ。何か不思議な幸せ感が伝わるのだった。

・ランタン村の地震による全村崩壊：

43 年前のランタン村。2015 年の地震で壊滅

43 年前にゴサインクンド（4600m）を超えて

2015 年大地震でヒマラヤ氷河が崩落、途中の大きい池に落ち土石流になって村を直撃した。歩いてたどり着いた所に出現したのは、幅 500m、深さ 50m、長さは 2 ㎞以上（谷底にたどり着くまで）ほどもえぐられた恐ろしいところ。まさにここにランタン村があったのだ。そこは巨岩がごろごろ。地震による崩落により 195 名死亡、ほぼ村全体が標高差数千メートルの崩落により一気に崩壊したようだ。昔、

村があったところの山側には高さ数百 m もある大絶壁がある。この大絶壁の上から、いや標高 7000m 級

のヒマラヤから氷河が落ちてきて、途中、どでかい岩や氷河、土石を巻き込んでドドーンと落ちてきたからひとたまりもない。そしてこれだけ巨大にえぐりこんで流されたのだ。村人が逃げる隙も与えなかっただろう。過去の経験が生きる余地もない。日本の報告会で聞いた話では、何千mもの落差で落ちてきた氷河などの塊の激しいスピードで、強風が起き、村の樹々がなぎ倒されたと聞いた。すさまじい風圧だったであろう。

世界各国の援助 100%で 20 軒ほどのホテルが全て村の上の地に再建されたそうだ。えぐられた場所のすぐ上の地域にホテルが建てられ、学校もできていた。生き延びた（カトマンズや隣の部落にいて助かった）子供や親せき等により再建されたとのことだ。ランタン村にあった郡のキャンプもやられたそうで、隣の村にいて助かった人が少しいたそうだ。地震による被害の記念館があったが、コロナで 2 年以上外国人トレッカーもなく、開けて見させてもらえる状況ではなかった。

我々が泊ったホテル Glacier hotel は、両親が地震による崩落で亡くなってしまったが、息子はカトマンズで勉強している時で助かり、ホテルを経営していた。彼はタイの大学で英語媒体にて学んでいる。ＳＮＳで知り合った女性と結婚していたが、大柄で体格のいいチベット系のシェルパ族ではなく、スマートな奥さんだった。1 歳くらいのかわいい赤ちゃんがいて、若い 3 人の親子はランタン村の希望の光のようだった。ちなみに宿の主人は私と同じ乗合ジープでカトマンズから来ていたが、私が 3 日間難儀して歩いて来た道を 1 日半で到着していた。さすが山の民族はたくましい。

新ランタン村　Glacier ホテルの一家

ランタン村を襲った地震による崩落

新しく建てられたホテル

43 年前の大学時代に訪れた時には、文化人類学のような研究をしている女性、貞兼さんという方にランタン村で会った。ランタン村には7回くらい訪れているそうで、村人とチベットの地元の言葉で交流していた。日本の薬だとどんな病気にもなぜか効くと言っていた。

当時訪れた時に村の祭りがランタン村のお寺ゴンパであり、一晩中夜明けまで村の若い女性達が円陣を組み、手を取り合って、とても単調な踊りを踊り、歌い続けていた。そんな思い出の寺ゴンパも 2015 年の大地震で一気につぶれ流されてしまった。この地震での救済活動の報告として貞兼さんが東京で講演を数年前に行い、40 年ぶりにお会いすることができた。当時の写真を見せると、これ私かしらとなぜか言われた。

ランタン村の馬の親子

今のランタン村

村の小学校：7 年生くらいまで

・オーストラリア人トレッカー：

歩いて 2 泊目のリバーサイドホテルで会い、ランタン、キャンジンゴンパと 4 晩一緒になった。私はリバーサイドの宿に着いてから、外のテーブルでフルートを吹いていると声をかけてくれた。彼は美男子の 30 代で、今度オリンピックのあるブリスベンから来た方。ブリスベンは私が協力隊の後 1 か月ホームステイした思い出の町。ショッピングモールのステージでポリネシアンの踊りをオーストラリア人が踊っていたのを印象深く思い出す。私はその後ワーキングホリデイでシドニーに半年滞在し日本人子女相手に塾で算数など教えた。はじめにボンダイビーチ近くで公務員のジョンと部屋をシェアして住んだ。彼があの当時から朝 7 時からフレックスタイムで働いていたこと、露天商でも 1 か月の休暇をしっかりとる生活に驚いたものだ。

トレッキングで会った彼は、なんとプールの管理・修理の仕事で夏の 5 か月間だけ仕事をし、1 年のあとの 7 か月は旅に出ているそうだ。美人の彼女と別れ、お金もなく傷心の雰囲気。ランタン谷の最奥のキャンジンゴンパの寺でラマ僧から 1 か月くらい瞑想を教えてもらいたい、というような人だった。タイに何か月もいたことがあり、タイ語を覚え、タイの楽器なども習ったり、タイの田舎で一緒に村人とお酒を楽しんだりしたそうだ。仕事もないのに上海に数か月も過ごしたこともあるという不思議な人。彼が、私とオランダカップルに今晩のトレッキング宿も一緒に、明日もぜひ一緒に、と言ってくれた。

・キャンジンゴンパ 3,800m からキャンジンリ 4,600m に登頂：

43 年前： 12 月のキャンジンゴンパ付近

白く輝くランシサ・リ（6,420m）を望む

雨季なのにその日の朝は快晴で、朝 5 時半にシェルパのガイドが戸を叩いて起こしてくれ、屋上に上ると青空に真っ白いヒマラヤの頂が仰ぎ見られた。43 年前に見た、この宮廷のような形のヒマラヤ、ランシサ・リ。そしてオーストラリア人がまず犬とガイドと 4000m あたりの山を目指して登り始め、急ぎ私とガイドが続く。朝 6 時には出発。オーストラリア人が犬を連れて登っていた。上に行くに従いどんどんガスが出てきたが、しっかりランタンヒマールの雄姿を青空とガスを背に高山植物の花咲くところから見ることができた。

彼は、いろいろな国に行きいろいろな植物に出合うと、その力を感じると言い、植物、花の写真をたくさん綺麗に撮っていた。4000m 付近で大鷲がゆうゆうと飛んでいた。斜面に初夏の高山植物花々が咲き誇っていた。

左奥の谷を行くとランシサ・リ

谷を下りるとランタン村

まず初めの頂。チベット仏教の旗タルチョーはためく縄が四方八方に張られている。旗にはチベット仏教の経文がチベット文字で書かれていた。私の登頂写真をかっこよく撮ってくれた。ただ SNS でとうとう送れなかったが。眼下にはキャンジンゴンパの青いホテル群が小さく見え、その左手川上には広い扇状地があり、以前、そこに観光客を呼ぶ空港の建設が計画されたこともあったそうだ。その川上に 43 年前ずっと奥まで雪のある道を歩き、7,000m 級のランシサ・リの美しい雄姿を見たのだった。

ガンジャラ峠（5000m）方面を望む

ランタン・リルン 7223m

登ってきた道

そしてさらに 4,600m のキャンジン・リの頂へ。空気が薄く 5m 歩いては休まないと登れず、息がぜいぜい。朝早く出たので、たっぷり時間に余裕があり、4 時間以上かけて登った。ヒマラヤの峰々が雄大。オーストラリア人は休むたびに長めに休むせいか私に遅れ始めた。犬も元気に一緒に登ってきた。谷の反対側に 43 年前に 5000m のガンジャラ峠を目指して挑んだ山々が見えた。あの時は新雪に覆われて進めなくなり、泣く泣く峠越えをあきらめたのだった。ガンジャラ峠は、昔、女性の山岳会エーデルワイスが踏破したコースだ。それを目指していた同行者にはすまなかったとの思いが残る。代わりに標高 4,600m のゴサインクンドを超えて、美人の誉れ高いヘランブーに下った。彼は大学の山岳部で鍛えていた。当時既に医師国家試験は合格していて帰国後に医師になられている。

氷河が見える

キムシュン 6745m

ヒマラヤと花畑、犬、ガイド

・標高 3800m のキャンジンゴンパで宴会：オーストラリア人、オランダ人カップルと

オーストラリア人は、前日まで酒は飲まない、と修行僧のような雰囲気もあったのに、この日は地酒チャンを飲んでみよう、宴会だと高山病に注意すべき標高の高い地で盛り上がってしまった。体格の良いシェルパのおばちゃんにお酒を出してもらい。彼が宿にあった小さなウクレレで奏でていた姿が印象的だった。私がフルートを演奏して、カトマンズの竹笛奏者の演奏も携帯の録画で聞いてもらった。私のフルートの方が、正直いい、なんて言っていたが。私がオーストラリアの有名な歌、ウォルチンマチューダをフルートで奏でるととても喜んでくれた。「蛍のひかり」を演奏したら、オランダ人がオランダの国歌を演奏してくれて感激、有難う、と喜んでいた。そうだったのか、とこちらは驚いたが、でも本当はスコットランド民謡であった。

また私が、今まで 43 か国訪問したこと、ネパール協力隊、オーストラリア 7 か月、インドでヨガ道場滞在、アラブ首長国連邦で 1 年砂漠の植林事業をパキスタン人労働者 20 人としたこと、農薬会社の海外部で東欧、中近東、アフリカ担当で出張したことなど話すと興味深そうにしていた。

私もランタン村から夜軽い頭痛と胸の苦しさがあったが、彼も夜は頭痛などあったようで、なかなか起きてこなかった。

オーストラリア人とガイド: キャンジンリの途中の山で

・キャンジンゴンパでの祭とスイス人カップル：

もうひとつの出会い。年に一度の満月の日のキャンジンゴンパのお寺でのお祭りがあり、大きな体のチベット系の人たち（ネパールではボテ、と言う）が集まり、寺ゴンパで 3 日間お祈りをするというので見学に行った。お寺の前にたたずんでいると、お茶を飲みなさいとお茶をくれた。寺の中では五体投地や読経が行われている。

そのお寺の前で出会ったスイス人の若い美男美女のカップル、髪をカールで伸ばしてかっこいい。
まだ 20 代後半か。女性は英語ができないようだったので私は彼氏と話したところ、彼の両親は 25 年前にこのランタン谷とゴサインクンドを 3 週間ほどトレッキングしたそうで、同じところに二人は来たのだそうだ。私から、自分も 43 年ぶりにこの地に来たし、その後協力隊でも来た、スイスにも新婚旅行などで行ったことがある、というと興味深そうにしていた。山登りも専門的にやっているようでとても素敵なカップル。仕事をやめてきたそうで、ネパールの後はラオス、カンボジアを旅するそうだ。じっくり未知の世界を見よう、という姿勢がいい。

・日本人トレッカーは：

日本からも若い人たちがどんどん昔のように来てほしいが誰にも会うことはなかった。ガイドによると、日本人は少なくなった、来ても 50 代以上ばかりだ、と。今回のトレッキングで出会ったのは、欧米から、そして一組ずつインド、韓国の 20 代の若者たち。スイスは初任給が日本の 3 倍高いとも聞くが、そういうことも響いているかもしれない。欧米はドイツ、イタリア、フランス、カナダなどの若人。若い女性たちもザックを結構自分で持ち、ガイドはいてもポーターは使わないようだった。さすがたくましい。

以前、北海道の利尻岳登山で出会ったオーストラリア人は、2 か月の休暇で日本に来て、1 か月は四国で武道を学び、一か月は旅をしていた。IT の仕事をしていて 1 年間休暇をためて、2 年分の休暇を一度に取って 2 か月間日本に来たと言っていた。うらやましいかぎり。

ネパールで協力隊の後、オーストラリアに 7 か月行ったが、オーストラリア人はすでにこの 40 年前にフレックスタイムを導入していて、公務員の人（1 か月ルームシェアしました）は朝 7 時に出勤し、午後 2 時過ぎからゆっくり自由時間であった。

オーストラリアは、路上の物売りも、ちゃんと年に 1 か月くらいバカンスの休暇を取っていた。がつがつ働かない、自分の時間を大切にする意識がすごい。床屋さんも絶対一日 8 時間以上働かないので、夕方行く

床屋がなかった。私はオーストラリアにも 7 か月滞在したが、それでも深く長い歴史と文化のあるネパールが何十倍も熱い思い出があるようだ。

・4 泊一緒のホテルだったオランダ人カップル：

8 日間歩いたランタントレッキングで、オランダ人カップルとは出発と最終地点のシャブルベンシ等ほぼ行程が似ていた。ただ女性の方は、普段ほとんど運動しないそうで、ランタン村ではへたって休息の日を取った。女性はタイ生れで母親が父親と離婚し、彼女が 10 歳の時に母親と一緒にオランダに移り住んだそうだ。オランダでは年間 29 日の有給休暇が取れ、国民はほとんど消化しているそうだ。たとえば 2 週間の休暇を一年間に 2 回取れるわけだ。土日祝日以外で 29 日、それも新入社員でも転職したばかりでも。日本はどうかと聞かれ、とほほ。週に 4 日働いても 5 日働いた人の 8 割貰える、そんな制度は 30 年も前からある国。日本はそういう点は本当に遅れている。

でも何か幸せそうでない？のか、彼が言うにはみんなお金のことばかり考えていていやになり、それで仕事もやめ、家も売って長い旅にでた、ネパールに 3 か月いて、それからタイに行く、ゆっくり彼女の生れ故郷に行って彼女のお父さんや親せきに会えるのが楽しみだと、と。タイの田舎はいいだろうな、楽しみだと言う。タイ出身の彼女が言うには、タイの田舎では、長崎の精霊流し、のように先祖の霊をお参りする小舟を川に流すお祭りがあるそうだ。

そしてオーストラリア人が、以前にタイに何か月かいて、田舎で宴会とか楽しい経験をした、タイ語もだいぶ覚えて楽しくなった、というような話をした。オランダ人は、日本は素晴らしく、綺麗な国だと YouTube を見て思い込んでいて、なんとかタイの後に日本に旅行したい、今は団体客だけど数か月後には個人客で入れるようになっていてほしい、と言っていた。憧れの美しい国、と日本を思っていることに対し、いやいやそんなことはない、とも言えず。（10 月より外国人個人客来日解禁）日本は何ヶ月見ると十分見られる？と聞かれ唖然とする。

オランダカップルはトレッキングに来る前に、ブッダの生まれた聖地ルンビニに旅したそうだ。ルンビニは釈迦ムニブッダの生まれた聖地なので、世界中の仏教国のお寺があり素晴らしいと言っていた。私もいつか行こうと思う。かみさんを連れてヒマラヤや、ジャナカプールでラーマとシータの結婚を再現するお祭りも見せて。

・ネパールは週休 1 日で、多く長い祭り休暇：

さてネパールはどうかというと、今までずっと土曜日だけ休日で週休 1 日。ヒンズー教の休日はいろいろあるが。ネパールの勤務時間は朝 10 時から午後 4 時か 5 時までと少ないので週休 1 日でもいいのだとも言う。この 5 月頃に週休二日を政府は導入を試みたが、民間部門からは強い反対意見が出て、民間は週休二日が取り消しになり、政府機関だけ週休二日だという。推測するになぜ学校側なども含め反対したかというと、朝 9 時過ぎまでいろいろ学校の早朝授業があるなど、10 時から仕事がある前提で朝の活動を組み込んでいるので、それを一気にやめなさいと言われても無理という感じのようだ。

10 月にダサインという 10 日の休暇があり、2 週間後くらいにティハールという 3 日間の大事なお祭りがあり、田舎の人は両方まとめて一か月休暇を取り、田舎の故郷の村に帰ったりする。日本人からするとうらやましい。学校も公立は 1 か月まとめて休み、私立は二つの祭りの間は授業があるとか。グローバル企業がネパールで事業をやろうとすると、そんなに長く休まれると困る、ということになる。外国企業が進出しない理由の一つに休暇が祭りで多すぎる点もあるそうだ。停電が多く、水道、道路などの不備、外国企業に対

する税金、法制度の壁、需要の小ささも今まで大きな妨げになってきただろうが。

・トレッキング 7 日目、シェルパガウン。最後の山の宿の村。

標高 2,563m。日本の北アルプスの標高。村からは山々の峰、雲や霞の流れなど雄大な景色だ。向かいの南向きの大斜面にはネパールの土着の民族たちが大きく豊かそうな村を作っているのが見える。一方、チベットから逃れて来たシェルパ族が 100 年ほど前か、もともといるネパール人たちが住まないような大急斜面に樹林を切り開き、ジャガイモ畑を作り、住み着いた。今、10 軒ほど。5 年ほど前からトレッキングコースとなり、ホテルを始めたそうだ。標高が高く涼しいので米も稗もトウモロコシも取れないという。

宿の近所の親父がやってきて、地酒ロキシを片手に、かまどと地酒チャンを作る大鍋の脇にニコニコと座る。童話に出てくるようだ。チャンは、宿主の 40 代女性が米を下の村で買い 4-5 時間担いで運び作る。それを 20 リッターも担ぎ上の村、キャンジンゴンパまで売りに行くという。私が 2 日歩いて下りて来た道を 1 日で担ぎ上げるのだ。なんと強靭な。

前の晩に泊まったリバーサイドの主人は、このシェルパガウンの女主人の弟で、互いに行き来して助け合っている。リバーサイドの子供が病気の時に母親とカトマンズに長く滞在する時は応援に来るという。

こんな山村のホテルで女主人は携帯でインドのテレビドラマを楽しんでいた。

・シェルパガウンの宿の 44 歳の女将に聞いた話。

女将の両親はチベットから逃れてきて、自分はチベットの言葉は話さない。ネパールの８割以上の人々が信仰するヒンズー教のダサイン、ティハールの祭は祝わない。シェルパの独自の祭りを祝う。昨日の祭りは夜1時までゴンパであり、ダライラマの誕生日を祝った。毎朝ダライラマの写真のある祭壇に祈りを捧げる。ダライラマがネパールに来ると中国が怒る。村の人は殺生をいやしみ、牛や鶏を殺して食べない。ただ鶏肉を下の村で買って来て食べはする。昔、私がいたボジプールでは家で沢山鳩を飼い潰して食べたが、このシェルパの村（10 軒ほど）では鶏も飼わないし殺したりしない。魚も殆ど食べない。ランタン地域のシェルパの文化は、エベレストあたりのソールクンブーのシェルパと違う。子供をカトマンズの学校に小学校からやるがチベット系の学校だ。

村に電気が来たのは 5 年前、それからテレビ、冷蔵庫、携帯が入って来た。ちなみに女将はよく携帯でテレビドラマを見ていた。昔はガラスの窓はなく木の窓だけで、閉めると真っ暗になった。村に外国人トレッカーが来るようになったのは 3ー4 年前から。車の道路が来たのは 3 年前。

ホテルの下の道を行く牛にチャンを大タライで沢山飲ませていたが、アルコール分のない酸味が少しあるもの。隣のホテルに片足がなく松葉杖の人がいて大変そう。ジャガイモ、トウモロコシは村で作るが、米、小麦、ヒエなどは標高が高いので作れなく、下の村から担いで来る。地酒のロキシ、チャンは買ってきた米

で自分で作る。チャンは寝る前に少しだけ飲むとのこと。

・トレッキング、下り最後の日。

翌朝、シェルパガウンに別れを告げて歩き始めると馬の隊列に会う。斜面の道を歩き、途中トイレをしようとかがむと、お尻に向かって下草から蛭（ジュガ）が体を上に伸ばして喰いつこうと狙っていた。あぶない。今までトレッキング中に何度か蛭に手を喰いつかれてガイドが手で取ってくれていたが。蛭は馬や牛が草むらに入ってくると足に喰いつくそうだ。

振り向けばシェルパガウンの急斜面の村と畑、林が美しく、背後にはヒマラヤが聳え、眼下には 2 泊目に泊ったバンブーの宿が渓谷の下に見下ろせる。

数時間歩いて、下りになって来て途中、下から登ってくる 40 歳ほどの農家の婦人に会う。少し話を聞くと、畑作業に行くそうだが、何かお腹の薬がないかと聞かれるが適当なものがない。婦人には 5 人の子供がいてみんなカトマンズで勉強しているので仕送りをしないといけない。ところが去年、旦那がなくなり、自分でジャガイモ畑をやってお金を送ってやらないといけない、と言う。一体どうやってやりくりができるのだろうと心配にもなり、またなんとかやっていけているのだからたくましいなと思うばかり。

歩いて 3 時間、Khanjim という村に入り、車道が来ていた。若者はかっこいいバイクの周りに群がっている。今までより標高が低く温かいのでトウモロコシなど畑も豊かだ。大きい松ぼっくりの木の林が美しい。急斜面で膝に気をつけながらゆっくり下り、川を渡ってシャブルベンシ村にゴール。久々のビールがうまい。翌日、7 時間かけ車でカトマンズに向かった。

・ネパール人の一面：　親と先生は尊敬すべきもの

40 年前の協力隊時代に山の村で、私が「日本では、生徒が先生に暴力をふるったりして問題になっている」と言ったところ、山の生徒は「先生や親は尊敬するべき人で、生徒は暴力をふるうわけがない」と答え、日本のそのような事を頭からあり得ない話、とされた。今のネパールでは都会でもそういうところはあると思う。そんな素地があって、日本にいるネパール人は、アルバイトや介護でも真面目に誠実に働いて評判がいいのかなとも思う。

参考情報：

＊ネパールの経済状況　（在ネパール日本国大使館 図説 ネパール経済２０２２ より）

・名目 GDP の推移（10 年間で約 2.5 倍）：1.7 兆 Rupee → 4.2 兆 Rupee
　一人あたり名目 GDP は 10 年間で 1.5 倍になった（1,191 ドル＝12 万円ほど）

・産業別ＧＤＰ割合：農林水産業 25.8%（バングラ 13%）、不動産業 9.4%。労働人口の 64%が農林水産業

・政府予算：10 年で 4 倍以上に　：3,849 億 → 1 兆 6,328 億ルピー
　収入のうち、外国からの有償資金協力が 17.3%、無償資金協力 4.5%
　支出のうち、社会保障は 3.2%。　　債務総額は GDP の 37.3%

・海外からの直接投資：2020/21 年度までの累積 FDI 額(コミットメントベース)
　中国 47.6%、インド 27.0%、米国 4%、韓国 3.5%。日本は 0.9%で第 11 位。
　主な投資分野：エネルギー業（35.8%）、サービス業（19.8%）、観光業（19.5%）

・貿易（2020/21）：輸入が輸出の 10.9 倍　（輸出 1,411 億ルピー、輸入 1.54 兆ルピー）
　輸出先：　インド 75%、　米国 10%　主に農産物
　輸入相手国：インド 63.1%、中国 15.2%。日本 0.5%未満で不明。中国からが緩やかに増加。
　貿易赤字：GDP の 32%

・海外出稼ぎ累計：中近東 500 万人、韓国 5 万人、日本 2.1 万人　計 588 万人（インドを除く）
　カタール 160 万、マレーシア 167 万、サウジアラビア 118 万、UAE84 万、クウェート 19 万
　ピーク年：2013/14 は 53 万人、徐々に減り 2019/20 は 19 万人、2020/21 コロナで減少 7 万人

・郷里送金額（外国からネパールへ）：10 年で 3 倍近く増加（3600 億→9610 億 Rupee）
　GDP 比 22.5%で高い。南アジアでも突出して高い。出稼ぎ者減っても金額は増加。

・物価上昇：消費者物価指数は 6 年で約 4 割上昇。2019/20 年度 6.2%、2020/21 年度 3.6%増

・マネーサプライ：10 年で 4.5 倍（年間伸び率 25%位）：金融機関から供給されている通貨総量。「通貨供給量」

・外貨準備高：10 年で 3.5 倍：2021/22 14,000 億 Rupees 輸入可能月数：17.5 か月

＊アラブ首長国連邦（UAE）での砂漠の植林事業：(詳細)

ネパール協力隊、オーストラリアでのワーキングホリデイ後、砂漠の植林事業に参加した。パキスタン人労働者 20 人と共に UAE のアルアイン市から車で 1 時間ほどのルブアルハリ砂漠のキャンプで生活をし、働いた。毎晩、砂漠で満天の星空であった。植林して 1m ほどの高さに生育すれば国が買い取ってくれるプロジェクト。300ha の砂漠の広大な土地に井戸を７つ掘りポンプを設置してパイプを敷き詰める。遊牧民のベドウィンが砂漠のキャンプの周りにテント生活をしていて、飼われている山羊やラクダから苗木を守るためフェンスを張る。フェンスはわざわざ日本から運ばれたものだ。そしてアレッポ松の苗木を植え、水やりをし、何年かがかりで育てる。

これを 20 人のパキスタン労働者と 2 人の日本人で行うのだ。日本人ひとりはアブダビ事務所勤務。
砂漠でも井戸を 70m も掘ると水の層が 3 つ出て来る。この広大な砂漠で地下には水の層があるのはなんとも不思議だ。井戸を掘るには初め水もいる、掘るためにエンジンを動かす発電機も要る。３つの水の層が出てくれば電動ポンプで汲み上げる。汲み上げた水を 300ha に均等に散布できるようパイプを敷き詰める。大きなパイプは砂漠の炎天下で破裂しないよう 50cm もユンボで掘って埋めないといけない。さらに苗木の位置ごとに距離に応じて計算して同じ水圧で潅水されるようにする。

時々埋めたポンプが破裂して水が吹き出しているとパイプを継ぎなおさないといけない。砂漠なので少し塩辛い水しか出てこないが、それに耐えるアレッポ松を植える。苗木を広大な土地に植えるのも、涼しい夜間に車のヘッドライトの灯りでやる。トラックでたくさんの苗木を運び、大勢で植えていく。一本一本の苗木に、細い給水の管に砂が詰まって水の出が悪くなっていないかチェックし、詰まっていれば修復し続けないといけない。そして苗木の周りに塩辛い水を撒くので、日照りで塩のせんべいができる。それを 20 人の労働者が箒で苗木から掃いて離さないと、雨が降った時に根がやられてしまう。

こうした作業をパキスタン人労働者に指導しながらやる。英語が分かる高卒のパキスタン人が一人いて、彼を通じて指示する。ネパール語とパキスタンのウルドゥー語がサンスクリットをもとにして似ていたので段々通じるように私はなった。

パキスタン人労働者はパキスタンのペシャワールというアフガニスタンに近い村の出身で、学校に行っていなく文字が読めない。昼は毎日パキスタンカレーを食べた。20 人の労働者のうち 1 人はコック専門で、毎日 3 回 20 人分のカレー料理を作っていた。彼らは毎日 5 回アラーの神に祈りを捧げていた。夕食後は、毎晩字が読める人の読むコーランをみんなで丸座になって聞いていた。夜もキャンプの中では暑いので、みんな外で寝ていた。風で耳に砂が入らないようスカーフを顔に巻き付けたり風よけを建てたりして。ラマダン

の断食月は、日が昇ってから日没まで何も飲み食いしない。その分、夕食はまずおいしい果物ジュースに始まり豪華な料理であった。ラマダン中も日照りの砂漠の仕事でも、原則は昼間水を飲まない。それで早めに仕事を終え、昼から室内で休んでいた。

労働者の給与は 6 万円ほどで、毎月一度町に出てその 95%を故郷の家族に送金していたようだ。毎年飛行機代を会社に出してもらい 1 ヶ月の休暇を取っていた。奥さんや家族、友人と楽しくのんびり過ごす。反対にうらやましい。10 年、15 年も働くと、たっぷりお金も貯まって幸せなその後の夢があるようだ。家を買う、タクシー会社をやる、と。

砂漠の山は風で動く。登ればきれいな山波であった。その山にランドクルーザーで登ることもできた。それを楽しみにアブダビやドバイで働く日本人たちが観光にやってきたりした。ただし山を登る斜面や速度を誤ると砂にはまり、二度と車を出せなくなってしまう怖さがあった。

春先にほんの少しでも雨が降ると砂漠であってもちょっとだけサボテンのような緑が芽吹いた。遊牧民のベドウィンのラクダに春は子供ができて連れて歩く姿が見られた。サソリもいた。

月に一度砂漠のキャンプからアブダビの事務所に出る機会があった。サウジアラビアではお酒は一切販売していなかったが、UAE では一人当たりの数量制限の中で購入できた。日本人とも少し交流ができ、日本人会の運動会のマラソンで並みいる大手企業や商社の人たちの中で優勝したこともある。

アブダビの街では毎朝 5 時にどでかいコーランの響きがスピーカーで流れた。

UAE の植林局の高官と家族を大阪に招いて琵琶湖や京都近郊を案内したことがある。日本人にとっては普通の山なのに、何もしなくても山が深い緑の樹木で覆われていることに感銘していた様子にこちらが驚いた。

アラブ首長国連邦（UAE）には、その後勤務した日本農薬の海外部で、東ヨーロッパ、中近東、アフリカの担当となり、年に数回いろいろな国に出張した。なかでも UAE は温室栽培、路地野菜の市場があり、砂漠の植林キャンプに近いアルアインで滞在することがあった。農薬のセミナーをやって新聞記事になったこともある。懐かしい UAE だ。

訪問した国々：43 か国　　2022 年末現在

大学休学時：　ネパール 1 か月（22 日間：ランタン・ゴサインクンドのトレッキング）
　　インド 3 か月（ロナワラ 1 か月、プーナ 1 か月：ラジネーシン・ヨガ道場、リシケシ）

青年海外協力隊:ネパール 2 年（ポカラ語学訓練 1 か月、ダンクッタ柑橘試験場 1 か月、後にボジプール）
　:帰国時：スリランカ、シンガポール、マレーシア、タイ

ワーキングホリデー：オーストラリア 7 か月（ブリスベン 1 か月 Homestay、シドニー）

アラブ首長国連邦（UAE） 1 年： ルブアルハリ砂漠のアルアイン近くの砂漠の植林事業）
　　オーストラリア
日本農薬 海外部：
・東欧：　ポーランド、ハンガリー、チェコスロバキア、ユーゴスラビア、ブルガリア、ロシア、
　　オーストリア
・中近東：　UAE、サウジアラビア、イラン、イラク、オマーン、ヨルダン、トルコ
・アフリカ：　エジプト、コートジボワール、ナイジェリア、ガーナ

三菱油化：　香港、中国（広州、三明）、韓国
　　：　オランダ
外資系医薬品ケーカー（BioMarin、メルク、他）
・米国（サンフランシスコ 5 回、シカゴ、グアム、セントルイス）、
・ドイツ（ダルムシュタット、ミュンヘン）
・イスラエル（エルサレム、ベツレヘム）
・マカオ、シンガポール、上海、バリ

新婚旅行：　オーストリア、ドイツ（ミュンヘン）、スイス、フランス（シャモニー）
他、個人旅行：
　欧州：　ドイツ 5 回、スイス、オーストリア、フランス、イタリア、英国、ベルギー）
　アジア：ネパール 7 回、タイ、韓国、中国
　米国（ハワイ）、カナダ（バンフ）

ヒマラヤの麓の結婚行列

：青年海外協力隊 昭和 56 年 2 次（果樹 ボジプール郡）長谷川隆　1983 年

純白の馬に乗る花嫁。標高 1,900m。山道を 7 時間の結婚行列。花婿の村人が連れ添う。

ピーパパパードンドン、昼夜を問わず結婚行列の太鼓や金管楽器のけたたましい演奏が山々に響き渡る。ここは東ネパール・コシ県ボジプール郡。標高 600m から 2300m の大丘陵地帯。車の通るダランの町まで出るには、文字通り山越え谷越え 2 日間まるまる歩かねばならない。15 年も前は、カトマンズのパシュパティナート寺院に巡礼に行くのに片道 13 日間かけて標高 2 千ｍの山々を何度か超えて行ったと下宿のお婆ちゃんは言っていた。

今月はマンシール月（11 月中旬から 12 月中旬）の 11 月下旬。1 年に結婚してよい月としてはならない月とがヒンズー教で決められている。今月は稲刈り収穫作業も終えた農民たちにとって、喜びと安らぎの時で、全国的に 1 年のうちでも結婚最盛期。

太鼓や金管楽器をけたたましく鳴らしながら山道を登り下り結婚行列は行く。

右の写真：右から、私の馬、花婿の村ピャウリで果樹苗木を育成する大地主、私、馬子、地主の使用人と弟さん。

私が参加した結婚行列は、私の指導する柑橘苗木屋のある村の村長さんの長男の結婚式のもの。花婿 19 歳、花嫁 16 歳。まず花婿の村の男衆 70 人くらいと花婿が、花嫁の家にやってきていた。ネパールでは同じカースト（階級）間で、そして親によって縁談は決められる。その花嫁の家に 2 泊して、夜も

いろいろな儀式が華やかに執り行われ、いよいよ今日は花嫁を連れての行進だ。

朝 10 時頃、チョータラという大きな樹の下で待っているとやってきた。ドンドンパーパパー、金の冠と深紅の衣装の花嫁は純白の馬に乗せられて、まだ幼さの残る顔に不安と緊張の表情いっぱいにやってくる。先頭の演奏するグループは私を日本人と知ると、どうだこれを一つ吹いてみろ、鳴らしてみろと大騒ぎ。そして行進は標高 1500m から 1000m の谷へ、さらに 1900m の丘陵まで急な登りだ。

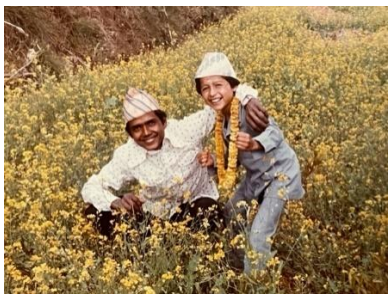
ここの頂上のムラバリという所に紅茶、酒、飯、煙草で一服する茶屋があり、今来た長い行程も丸見えでいい景色。この先さらに行くと、雄姿輝くヒマラヤを仰いでの行進。足下は絶壁、時に霧がサーッと流れ、対する山肌には散々と農家の家々が見える。行き交う人によれば、今日通る結婚行列は三つ目という。こうして行列はヒマラヤを仰ぎ、四方の山々を見渡し、林の鳥のさえずりを聞き、山羊、牛、水牛の群れに会い、楽器を奏でて行進を続けるのだ。そして夕焼けの日暮れ時とうとう花婿の村、ピャウレに到着。

村の女衆も集まっていて、より演奏も盛大に。そして何人かが陽気に踊り出した。今晩は女衆のみが近所から呼ばれ、ごちそうがもてなされた。菜類と漬物、ごはん、豆スープだけ。酒はこのカーストは飲まない。一室に花嫁、花婿の座が設けられ、訪問者は額や頭に米粒、赤い粉で祝いの儀式をし、硬貨を与えた。夜は私も仲間に入り、囲炉裏端で火を囲み女衆と談笑した。

翌朝いよいよ村の男衆が呼び出され、山羊が一頭首を落とされ、すぐに料理。前庭にむしろが敷かれ、葉で作った皿が並べられ、客はそこに座を占める。むしろにあぐらをかき、何十人も輪になって、手で食事を口に運ぶ。肉だけでごちそうなのだ。

この後、2－3 回結婚式に呼ばれたが、いずれも田圃に丸座になって人々が座ると、給仕がより、葉っぱの皿にワシヅカミにご飯、肉が運ばれた。ただ食べ、食べ終えると解散する。なかには花嫁が 2 日間歩いて来たものもあった。こうして花嫁は、その村に根づくのである。

ボジプールの田植え風景。　　30 人ほどの女性が一斉に植える。男は耕す仕事。田植えと稲刈りの時期には結婚式はなく、その後の月に一斉に結婚式が行われる。



稲刈りは家族そろって　　秋のティハールの祭り　　1 年中炒って食べるトウモロコシ